黒衣の文樂

吉田榮三

昨年度朝日文化賞をいただいた機縁に演じた「義經千本櫻」の通し狂言を、このたびその受賞披露を兼ね、又文樂座初の情報局國民演劇参加作品として新橋演舞場四の替りに上演することになりました。

稽古から道行きまで「千本櫻」を通しでだすのは東京ではざつと十年ぶりといへませうか。戰前の平和時ですら、このやうな通し狂言を上演することはむづかしかつたのに、決戰酣の今日、かへつて以前にもまして盛大に上演できるといふのは、皇國に生れた有難さです。文樂生活六十年、全くこの六十年の間、今ほど大きな喜びと生甲斐を感じてゐる時はありません。

この「千本櫻」には久しぶりですつかり旨流に、黒ん坊で出るところは黒ん坊、出遣ひのところは出遣ひとハツキリ分けて、これまでの東京公演のやうに何もかも出遣ひばかりでやることはよしました。実はこれが、いはゞ文樂藝の本道なので、実際にこの千本櫻でも「すし屋」の時などは出遣ひではできないものなのです。

東京では、觀客と私共をなじませるといふので、本當は出來ないところでも横はず出遣ひでやらされましたが、黒ん坊だと人形そのものが浮き出て、動きも冴えるし效果もあがるのです。

もつとも最初の稽古と四段目と道行きの三つは出遣ひでやるべきところで、これは昔からざうでした。四段目は狐忠信の早變りなので出遣ひでないと越ぎがなくなるし、道行きは派手ですから黒ん坊だと辺が陰氣になつて場をこはす。結局黒ん坊でも出遣ひでもその場の情景によつて使ひ分けねばならぬものでせう。

「千本櫻」はもとゝ他の狂言よりずつと黒ん坊の少ないものですが、それでも出遣ひでばかり見慣れた東京の方々にはちよつと異樣に見えるかもしれません。しかし上手な人が使へば、少し見慣れた方なら黒ん坊でもすぐあれは誰だと分るものです。藝といふものは、本當はそこまで行かなくてはならぬものと思つてをります。（談）

文樂の千本

■新橋演舞場■

鬼太郎

18.7.17

「義經千本櫻」は院本中屈指の時代物であり、大物である。其の最初に於て義經主從の中心人物を明らかにし、平家方の知盛、維盛、教經三人を順々に全五段に絡ませて、何処にも漏き切れたる出來榮は、流石に名作者手擂ひの名篇。人形に歌舞伎に古今稀有なる人氣は誠に道理であり、文樂一座が今度國民演劇參加作品として、太夫と時間の許す限り、一本檜にこれを提出したは想ひ着きである。

◇

尤も、二ノ切「大物」の雄勁悲の最巧の場を出さぬは、畫竜に点睛を缺くの感たれど、趣向の要因、今の世には覗るべきたれば、省略是非なしとし、以下、床と人形の主なるものを拾ひて、手ッ取り早く紹介に及ぶ。

（初日當日交通の関係上開催時間に後れ、「椎の木」場の切より見物。）

◇

紋十郎の小金吾は、少し老けてゐれど確た出來。船屋では、床の古報がすつかり枯淡の味を出し、語る爲に語つて、聽かせる爲に語らぬアクぬけのしたは進歩老成、紋下の名を辱めぬ。權太の「数瞬き」や、内侍の「一門殘らず」が屆き切らぬのと、權太の「躍り出で」が混雜して、故人大隅が時代と世話を唯この一句の中に判然させたを思ひ出した位が、予に取つての不足の方で、人も知つたる長丁場を用意周到に語り切つたは此の人の海瑠璃の藝から言つて大手柄である。

◇

清六の紋は穏かであて切れ味よく、太夫と相應に渾さながらも從屬せぬ独自性のあるは立派な腕人形では、榮三の權太が論第一。

外では亀松の維盛（左がもう一息）小兵衛の女房たど好く、門出の景時も始終形ちの崩つてゐるのが感心。紋十郎のお里は、行儀好いが色氣不足。道行は榮三の忠信の独り舞臺。床は忠信、靜とも光る聲が耳朶り、幾ら景事でも然う吊上がらずともの事だ。

切の河連館では、織太夫が陰氣がながら無事た出來。人形では文五郎の靜を初め亀松の義經、多三郎の駿河、紋司の忠信など無難。玉助の狐忠信の引抜き早替りは御苦勞程度【冒頭は「千本櫻」道行右から文五郎の靜、榮三の忠信】